

二瓶治代氏ご体験文（書籍「あのとき子どもだった-東京大空襲 21 人の記録」より）

街は一面火の海だった。炎は猛り狂い風はゴーゴーと唸る。火の粉が縦横無尽に舞い上がり、追いかけてくる。布団やタタミ、柱や障子などが火の塊りとなって人々に襲いかかる。焼夷弾がヒュルヒュル・ザーザーと音を立てて雨のように降ってくる。髪が燃え、服が燃え、背負われた子どもが燃え……人は燃えながら走り、逃げ惑う。走ることができなくなった者はそのまま燃え尽きる。人々は生きたまま紅蓮の炎にのみ込まれていった。

1945年（昭和20年）3月10日未明、東京下町をたった2時間半で焦土と化し、10万人もの命を奪った東京大空襲。ここは武器を持たない庶民の戦場だった……

日本本土を防衛する最大の基地、サイパン、テニアン、グアムのマリアナ三島はすでにアメリカの手に落ちアメリカの制空権は東京をすっぽり覆うほどに広がっていた。しかし新聞、ラジオは「勝ってる」「勝ってる」の報道しか流していなかった。

その時私は8歳の女の子でした。私の家は5人家族で城東区（現江東区）亀戸に住んでいました。学校は疎開先のない居残り組の1年生と2年生だけでした。2月半ば頃から休校になっていました。空襲は毎日のようにありました。そうした中、6年生だけが卒業式のために疎開先から帰ってきました。

6年生の帰宅で私の近所は急ににぎやかになりました。私はとても嬉しくて3月9日は夕方まで近所の友達5～6人で、学校ごっこや戦争ごっこをしてとても楽しく遊んでいました。暗くなり始めたころ私の母が「ごはんだよ～」と呼びに来たので「じゃーまた、あしたあそぼうネ」と約束してそれぞれの家に帰ってゆきました。それが最後となってしまいました。

毎晩がそうであるように3月9日の夜も暗い電灯の下で粗末ではありましたが家族で夕食をすませ、ラジオのニュースを聴いたあと床につきました。ラジオからは「お山の杉の子」の歌が流れていたように思います。服は脱いだ順に枕元に置き、その脇にリュックサックと防空頭巾、それに靴を置いて眠ります。こうしておくとはどんな真暗闇でも順序さえ間違えなければチャント服を着て、リュックを背負い頭巾を被ることができます。リュックの中には、私が一番大切にしていた大好きなセーターと下着一式、それに氷砂糖と「宝物」といった、カンやビンに貼ってあるきれいなレットル数十枚が入っていました。

何時ごろだったのか、「今日はいつもと違う、起きろ！」という父の声にバネ仕掛けの人形のようにハネ起きた私は、ものすごい速さで着替えをして、リュックをしょい、防空頭巾を被り靴をはいて外に出ました。亀戸のあたりの空はまだ暗く炎はありませんでしたがとても寒く、風が非常に強く不気味な夜でした。火の粉らしいものがチラチラ風に舞っており2～3人の人が荷物を背負って、亀戸駅の方へ走っていたのを覚えています。南の方、砂町方面の空は真っ赤に見えました。下の方から「火の雲」のようなものがもくもく、もくもくと生きもののように湧き上がってくるように見えました。昼間一緒に遊んだ友達も防空頭巾を深く被った目で、不安そうに空を見上げていました。学校と一緒にいたり、私が親に叱られて「外に出された」時などいつも「はるよちゃん、ママゴト遊びしよう」と言ってゴザを抱えて遊びに来てくれた仲良しの昌男ちゃんは、もうちゃんと身支度をして防火用水の氷を

棒で砕いていました。防火用水の氷を砕くのは子どもの仕事でした。昌男ちゃんの家は9人家族で彼は6人兄弟の真中、勉強のよくできるやさしい子でした。

家の前は千葉街道（現在の京葉道路）が通り、その向こう側にJR総武線と小名木川線の二本の線路が走る土手があります。歩道にはお隣と共有する防空壕がありました。母と妹と私はその防空壕に駆け込みました。父は防空壕の外で周りの様子を見ながら、ふりかかる火を消したりしていたようです。兄は勤労働員先に行ってしまう居ませんでした。お隣の家族と一緒に震えながら防空壕の中で固まっていました。頭の上を人がガヤガヤ走る音や、物が弾け散るようなバシン、バシンという音、子どもの名を呼んでいるのでしょうか、絶叫するような叫び声、ギャアギャアと子どもたちの泣きわめく声にまじって「カーチャン！！ カチャン！！」と親を呼ぶ声が聞こえてきます。防空壕の中にもとても怖かったです。そのうち外で周りの様子を見ていた父の声がありました。「そこに居ると蒸し焼きになるぞッ、みんな早く出ろッ！」母と妹に続いて私も出ようとするとお隣のおばさんが「ここに居なさい、外に出ると焼け死んじゃうよ」といって私の服をつかんで引き留めてくれましたが、私はその手を振り切るようにして母にしがみつき防空壕を出ました。そして家族四人で向かい側の土手に登り、自分の家や町並みが燃えてゆくのをじっと視ていました。昼間遊んだ久代ちゃんの家も、昌男ちゃんの家も、やさしいお医者さまの家も、いつも見守ってくれていた近所のおじさん、おばさんの家も、空も、まわりも、あたり一面ゴーゴーと唸る炎に包まれていました。火の粉は横なぐりに容赦なく吹きつけ追いかけてきます。あの広い京葉道路は「火の川」のようになっていました。その中を人は強風に煽られ流され、皆亀戸駅の方に向かって吹き飛ばされるように走っていました。

燃えさかる炎はゴーゴーと音をたて家々を呑みこんでゆきました。人は燃えながら走っていました。負われた子どもが背中で燃えていました。お母さんはそのまま走り続けていました。お母さんに手を引かれた小さな子どもたちも燃えながら走っていました。転んだ子どもはその場で火の塊りとなって燃え尽きてゆきました。

消防車が何台も出て放水していましたが火は一向に消えません。水も出ません。やがて消防士にも火が移り、消防士たちは水の出ないホースを持ったままその場で生きたまま焼かれてゆきました。

どこからか逃れてきたのでしょうか、荷台にいっぱい荷物を積んだ一頭の馬が四本の足を広げて、突っ張るようにして炎の中にじっと立っていました。その荷物に火がつきゴーゴーと燃え上がり火は馬に燃え移りましたが馬はじっと立っていました。手綱を持った馬の飼い主のおじさんも馬にピタリと寄り添って馬と一緒に燃えてゆきました。

やがて土手にも火がまわり、枯れ草がいっせいに燃え上がったので私たち家族は土手を降り、両親と妹と私の四人も炎の渦巻く「火の海」の中を駅の方に向かって逃げていました。その途中で私の防空頭巾に火がつきました。父が「頭巾をとれッ！」と云ったので父とつないでいた手を離し、あごの下で結んでいるヒモをほどこうとした時、火の強風にあおられ私一人が炎に吸い込まれるように吹き飛ばされてしまいました。若草色の大好きな防空頭巾は真っ赤な空に舞い上がり、炎の中に消えてゆきました。

あたり一面炎に包まれどこをどう逃げたのか判りませんが突然真っ暗な場所に出ました。

そこだけ火がありません。高い大きな石の建物のような物がありました。その建物の陰に人が一人、立ったまま燃えていました。その炎は赤くみえませんでした。緑色のみえました。燃え上がる緑色の炎はきれいな振袖がヒラヒラゆれているように見えました。その人が私をじっと見つめ、手を出しました。「消してあげよう！」と思いフラフラとその人に近寄り私も手を出しました。でも私には火を払い除ける頭巾もなければリュックもありません。着ていたはずのオーバーも靴もありませんでした。私は自分の手で炎を払い除けようとして両手を出しました。すると後ろから女の人の声がしました。「あんた、そんなところに行くと死んじゃうよッ!」、私は弾かれたようにその場を離れたような気がします。そして何かにつかりました。その熱かったこと・・・それは真っ赤になって空に向かって曲がりくねった鉄の電柱でした。

その熱さで我に返ったとき「お父さんも、おかあちゃんも、妹もいない」、一人ぼっちになっていたことに気づきました。その時の恐怖は文字や言葉で表すすべがわかりません。「熱さ」を感じたのはそれが初めてでした。するといきなり私の腕をつかんだ人がいました。「お父さん？ お父さん？」「お父さんなの？ お父さんなの？」何度も何度も叫びましたが返事は聞こえませんでした。ただ私をグイグイ引っ張ってゆくだけです。走りながらも「お父さん？ お父さん？」とまた何度も何度も聞きましたが返事は聞こえませんでした。そのうち私はどうしたのか急に動けなくなり、その場にうずくまるように、倒れてしまいました。次第に遠のいてゆく意識の中で身体がじんわりと重くなり、熱くて、苦しくて、眠たくなってゆきました。気を失ってしまったようです。でも時々揺り動かされたのでしょうか、ふつと気がつくときと遠く近くカーン、カーンという音がしていました。また人の声が聞こえます。二人ぐらいで掛け合うように叫び続けている男の人の声でした。

「俺たちは日本人だッ！ 俺たちは日本人だッ！」

「こんな所で死ぬなッ！」

「生きるんだッ！ 生きるんだッ！」

私はまた気が遠くなってゆきます。そしてまた気がつくとき

「死んでたまるか！ 日本人！」

「ヤマトダマシイ・・・ ニッポンジン・・・」

「ヤマトダマシイ・・・ ニッポンジン・・・」 など、 など、

その声は一晩中聞こえていました。その様な中でどのくらいの時が過ぎたのでしょうか・・・ようやく火も下火になり周囲も灰明るくなってきた頃、私は重なり合う人の一番下から引きずり出されました。気が付いてみるとその人はやはり父でした。猛り狂う炎の中、父は私を見つけ、私の上に覆いかぶさるようにして私を庇い一晩中声をかけ続けていたのです。「お父さん」と云う間もなく父は「ここを動くな」と云うと又どこかに行ってしまいました。

一体ここはどこなのだろう・・・？ なにがあったんだろう・・・？ と思いました。見渡す限り何もありません。ただ白濁色の煙のような、霞のようなものがゆらゆらとただよっている茫漠とした世界が広がっているだけでした。音も無く、動くものもありません。ところどころで青白い炎がゆれてました。ふと足元を見たとき、私の上に折り重なるようになっていた人の殆どは真黒な炭のようになって死んでいました。「あ々、こんなになっちゃった」

と一人ポツンとつぶやきました。

私はこの日、生きたまま焼き殺された多くの死者たちに守られて助けていただきました。

しばらくすると父が母と妹を連れてもどってきました。髪も顔も焼けただれ、服はボロボロ、ハダシの足を引きずって・・・私はただ茫然と立ちすくんでいたようでした。5歳の妹は「足がイタイヨー、イタイヨー」とヒーヒー泣いていました。妹は足のふくらはぎに大きな火傷をしていたのですがその時は誰も気づきませんでした。死者に護られていたが故に、目の見える私が両親の手を引き兄を探しながら焼け跡を家のあった方向に歩きました。

<焼け跡に立つ>

何もなくなった焼け跡は、どこが私の家だったのかわかりません。そこに前日まで使っていた私が大好きな花柄のお皿が半分ほど地上にチョココンと顔をだしていました。「はるよちゃん、ここだよ」と手招きをしているようにみえました。それで家のあった場所を知ることができました。そのたった一枚のお皿は今も私の手元にあります。このお皿をじっと見ていると73年前の焼け跡の姿が映しだされてきます。

水道管だけが一本ぽつんと残っていました。蛇口をひねると水が少し出ました。私たちはその水を手で受けてのみましたが口の中はジャリジャリでした。でも冷たくてとてもおいしかったです。そこにどぶねずみのような一人の少年がきました。兄でした。父は「ああ、これでみんな揃った」と初めてひとこと言いました。私たち五人はよろよろと避難所に向かって歩きました。

地面は一面累々として続く死体でした。あるものは寄り添い、重なり合い、あるものはちらばって・・・それ以外なにもなかった・・・炭のように真黒になった人、人のかたちをとどめていない人、上半身が黒焦げで下半身に肌色を残している人、毛糸の腹巻をしたまま上半身つぶされている子ども、赤ちゃんを抱いたままうつ伏せになりそのまま黒焦げになっている母子、腕の中にしっかりと子どもを抱えたまま仰向けにひっくり返っている母と子・・・それらが棒切れのようにちらばって歩くことさえできません。その人たちを踏まないように除けながら、またぎながら、爪先立って歩きました。

小さな小さな赤ちゃんが手足をバタバタさせて、路上にころがってミイミイとか細かい声で泣いていました。思わず立ち止まると父が「こんな時、ダメだ」と云って私の手を強く引っぱりました。私は振り返りしながらその場を離れました。「赤ちゃんを見捨ててしまった」、この思いはたとえ幼かったとはいえ今も私の心に重く残り、消えることはありません。

この日、仲良しの昌男ちゃんは死んでしまいました。彼のお母さんも、学童疎開から帰ってきたばかりの昌男ちゃんのお兄さんも、妹も、おばあちゃんも亡くなりました。防空壕を出ようとした私に「ここにいなさい」と云ってくれたお隣のおばさんご一家も、友達の久代ちゃんもみんな死んでしまいました。前の日の夕方まで学校ゴッコや戦争ゴッコなどをして遊んでいた、大切な大切な友達でした。「じゃあ、またあしたネ」と云って別れた友達でした。やさしかった近所のおじさんや、おばさんもみんなどこかに消えてしまいました。

こうしてこの日は私のすぐそばで大勢の人が死んでゆきました。

<妹のやけど>

戦争はまだ続いていました。住む所も、食べるものも、着るものも、すべてを失った私たちは親戚や知人の家にお世話になりながら、辛く、苦しい毎日が続きました。その間に妹の火傷はどんどんと酷くなり患部にウジムシがわいてきました。医者も薬もありません。母は「ごめんね、ごめんね、」と云いながらウジムシを割り箸で摘み取りとっていました。妹は悲鳴をあげ、ひーひー泣きながら「おかあちゃんがヤッターじゃない、アメリカがヤッター」といっていました。

ある時、「市川にお医者さまができた」と云うので母が膿みのしたたる妹を負い、私もついてゆきました。医者には火傷をした人が大勢待っていました。待って、待ってやっと妹の番になりました。するとお医者さまが「油を持っていますか？ 食べる油ありますか？」と云いました。「油？ ありません・・・」と母が云うと「じゃあダメです。油がなければ見てあげられません」とそれは、それは冷たく断られました。母は床に土下座をして「どうか診てください、お願いします。炎の中やっと助かったんです、どうか診てください、助けてください」と拜んでいました。でも医者は「油を持ってない人は診察できません」の一点張りです。仕方なく妹を連れて帰ろうとした時、「あんた、これ使いな」といって小さなビンに入った一本の油をくださった男の人がいました。その方も火傷を負った患者さんでした。自分が生きてゆくのに精一杯の時代です。それなのに全く見ず知らずの私たちにご自分の治療用に持っていた貴重な一本の油をくださったのです。その優しい、思いやりのお心をもった方のお陰で妹は命を今につなぐことができました。妹の足には大きな火傷の痕が痛々しく今も残っていますが脚も二本揃って元気でおります。そして定年まで小学校の教師を勤めることができました。

<もう戦争はない>

妹の火傷も少しづつ回復し歩けるようになった頃、母の知り合いを頼って長野県の岡谷にゆきました。岡谷で1945年8月15日戦争の終わりを迎えました。終戦後は苦しい食料難の日々が続きました。いつまでも岡谷に居ることもできず二年半後に東京に戻ってきました。瓦礫の残る焼け跡にはバラックと言われた粗末な家が建ちはじめ、人々は力強く生活を始めていました。

私の家があった所には見知らぬ人の家が建っていました。父は別な所に土地を買いバラックを建てて生活をはじめました。私は新しい友達や懐かしい人々との出会いもあり、焼け跡で元気に遊び仮設の学校にも通い始めました。しかし町には浮浪児と呼ばれた、戦争孤児が大勢いました。みな髪はボサボサ、ボロボロの布をまとい、真っ黒な顔にうつろな目だけが光っていました。この子たちに出会うのは本当に辛かったです。国が始めた戦争で家族も家も、人としての人格も奪われた小さな命・・・彼らに何の罪がありましょう。日本の国は彼らにどんな償いをしたのでしょうか。

貧しいながらも家族が無事だった私たち一家は生活も段々と明るさを取り戻してゆきました。どんなに辛くても「もう戦争はない」この思いが戦後を生き抜く人々の共通の心の支

えとなり力になっていました。そうした中ラジオから美しい歌が流れてきました。夕方になると「童謡の時間」というのがあり、私はその時間が大好きでした。中でも川田正子が歌う「里の秋」が大好きでした。遠い戦地に送られたお父さんがどうか無事に帰ってきてほしい……当時多くの家族が抱いていた気持ちだったと思います。しかしこの歌は戦時中紆余曲折があったことを後で知りました。

<憲法との出会い>

東京大空襲と太平洋戦争が終わって5年の歳月が流れ私も中学生になっていました。1950年6月いつものように学校に行くとクラス中が騒然としていました。

朝鮮戦争が始まったのです。私の中学校は女子高でしたが戦争の話で大騒ぎでした。「また戦争が始まった」「また戦争が始まった……」みな恐怖と興奮に怯えながら話していました。私の学校は東京大空襲をもろに受けた日本橋にありました。焼失は免れたものの戦時中は学校全体が軍需工場になっていました。

私にとって「戦争」と云えば即、東京大空襲が甦ってきます。恐怖と戦慄に怯え私は話の輪に入れませんでした。その日の午前中の授業も全く覚えていません。昼食も喉を通らず一人で家に帰ってきてしまいました。家に飛び込んだら偶然そこに父がいました。いきなり「お父さん！ お父さん！ また戦争が始まったんだねッ！ 日本も戦争するのッ？ また戦争するのッ？」あまりの形相に父はびっくりしたのでしょう。何事かわからない様子でポカーンとしていました。「朝鮮で戦争が始まったんだよ！ 日本もまた戦争するの！？」と私は必死に聞きました。ちょっと間を置いて父はやっと解ったと云う顔で「ああ、あれか……大丈夫だよ、日本はもう戦争はしないよ」といいました。「だって朝鮮だよ、日本もまた戦争になるよ」と私が云うと「大丈夫、『日本はどんな事があってももう戦争は絶対にしない』と世界に対して約束した新しい憲法がある。だから日本はもう戦争は絶対にしない、だいたい戦争をしたくても日本には軍隊も無いし、戦争に使う武器も無い、だから戦争はしないよ」といいました。それを聞いた時、今まで張りつめていた気持ちが一気に崩れ、へなへなとその場に座り込んでしまいました。「よかったー」と息がそのまま言葉になりました。

社会科の授業で憲法九条の「戦争放棄」を習ったことを思い出しました。私が今の憲法を身近に感じたのはこの時が初めてでした。

あの戦争の時代を生き抜いた日本の庶民は新しい憲法を諸手を挙げて歓迎し、全身で受け止めたのだと思います。日本国憲法は日本人が命をかけて生みだし、次世代に繋げる大切な日本の宝であり、心なのです。

「あのとき子どもだった-東京大空襲 21 人の記録」

編：東京大空襲・戦災資料センター

発行：績文堂出版

発行日：2019年3月10日